

て、新たに創設された教会においてそれらのビジョンが「適切に」実践されているとは言い難い。こうした状況に直面すると彼らのビジョンは、良く言えば「口実」、悪く言えば「嘘」ではないかという疑惑が立ち上がる。やはり「名誉」や「金儲け」を目的としているのだろうか。

ここで、しかし、外国人宣教師も含めた現地のプロテスタント共同体の間でも、分裂が「道具主義」と看做されている点が考慮されなければならない。つまり、「名誉」や「金儲け」を目論んでいたとしても、分裂の実践者は、それらを達成することができないばかりか、むしろ「不名誉」を負いかねない。そうしたプロテスタント共同体に広く流通する否定的な言説について、分裂の実践者が知らないとは考えられない。もしも彼らが本場に「道具主義者」であるのなら、こうしたアイロニカルな眼差しの中で、どうして分裂を実践することができるのだろうか。それは肯定的に理解される(ことになる)分裂も確かにあるからである。

そこで本発表では、プロテスタント共同体の分裂を巡る評価について検討する。これによって分裂を道具主義と理解する可能性について考える。だが一方で、その評価の論理を、分裂の実践者が自らの分裂に対しても採用している可能性について議論を進める。そして、そうすることで、分裂が分裂の実践者にとって、道具主義ではなく、全く適切な「信仰実践」であることを明らかにする。

## エジプト一月二五日革命とコプト・キリスト教

岩崎 真紀

二〇一一年二月一日、エジプトではムバラク大統領が辞任し、三〇年にわたる独裁政権が終焉を迎えた。一月二五日にカイロの中心地タハリール広場で民衆による大規模な反体制デモが行われてからわずか二週間後のことであった。「アラブの春」と呼ばれるアラブ諸国における民衆による一連の民主化を求める抗議活動は、二〇一〇年一二月、チュニアの地方都市で、野菜売りの青年が警察官に売り物の野菜を没収されたことに抗議し焼身自殺を図ったことに端を発する。この事件を皮切りにチュニア各地で高失業率問題に対する抗議運動が増加し、ついには二〇一一年一月一日、二四年間政権の頂点にいたベン・アリー大統領が追放された。チュニアにおける民衆革命はただちに他のアラブ諸国に波及し、なかでもいち早く政権崩壊にいたったのがエジプトであった。

デモの中心であったタハリール広場ではエジプトの多数派であるムスリムと最大宗教マイノリティで総人口の約一〇%を占めるコプト・キリスト教徒の連帯が報じられ、宗教の差異を越えたところでのエジプト国民の一体化が謳われた。

しかしながら、ムバラクが退陣し、革命がある種「成就」した現在のエジプトでは、ムスリム諸集団の存在感が増しはじめている。その例として、ムバラク政権下で非合法化されていたムスリム同胞団が政党を結成し政治の表舞台に登場したこ

とや、サラフィー主義者と言われる武力闘争を辞さないムスリム集団によりコプト教会が襲撃されるといった事象が挙げられる。

本発表では、このような社会状況のなかで、マイノリティであるコプト・キリスト教徒が革命とそれにもなう社会変化をどのように受け止めているのかという点について、二〇一一年七月から八月にかけてエジプト南部の小都市ミニヤとフランスのパリ郊外でコプト・キリスト教徒（コプト正教徒）に対して行った半構造化インタビュー調査の結果をもとに考察を行った。

一月二五日革命は民衆による反政府運動により結実した。しかし、実際にはミニヤでデモに参加したインタビューはいなかった。フランスにおいてもパリでデモが行われたが、これに参加したインタビューもきわめて少ない。一月二五日革命はフェイスブックやツイッターを中心としたインターネットが抗議活動への動員に大きな役割を果たしたが、本調査の回答からはインターネットよりもテレビが人々と革命をつなぐ主要な媒介ツールであったことが明らかになった。

コプト正教会の長であるシヌヌス三世総主教は、当初ムバラクを支持しており信徒のデモ参加自粛を呼びかけていたが、二月十五日には一転して革命を称賛するコメントを出した。総主教のこのような日和見的とも言える動きは、一九八一年のサーダット大統領（当時）との対立と修道院への幽閉という経験を繰り返さないための「戦略」として考えることができるだろう。しかし、そうしたことも含め、革命に対する総主教

の対応について言及したインタビューはほとんど皆無であった。そこには、ムバラク政権が崩壊した今、民衆の意向を反映しているとは言い難かった総主教の当初の対応に対する平信徒や修道士の複雑な思いが反映されていると考えられる。

ミニヤのインタビューの約六七%が革命によってムスリムとコプトの関係が悪化したとする一方、フランスのインタビューはコプト・ムスリム関係に変化を感じていない割合が若干高い。これは、彼らが国外にいたためエジプト社会の微妙な変化をすぐに感じ取ることが難しいことを表していると考えられる。

## 大阪万博キリスト教館にみるキリスト教の戦後

川口 葉子

本発表では、一九七〇年に大阪吹田で行われた日本万国博覧会に出席されたキリスト教館とそれをめぐる批判から、七〇年代日本においてキリスト教が問い直されていく動きと、その契機となったものを考えようとするものである。

日本万国博は、六四〇〇万人の入場者と、高度経済の成果として華々しく存在し、また語られていった。そのなかに、最も小さいパビリオンとしてキリスト教館が存在した。それは、日本の教会が伝道のために構想・立案し、万国博で初めてプロテスタント、ローマ・カトリック、バチカンという三者が共同で出展したものであった。